

# 太陽の女たち

むすめ

——らいてうと晶子——

田 中 夏 美

今年の夏は実に暑かった。この暑さは日本人の体力の限界を越えたという記事が新聞にのり、ひとしきり話題になった。太陽に愛され、猛暑とともに水不足に泣いた夏であったが、ここから我が田に水を引いていくことにしよう。

「元始女性は太陽であつた。」と題される一文は、明治四四年九月『青鞥』創刊号に載つた平塚らいてうによる発刊の辞である。女性解放運動に一時代を画したマニフェストとしてあまりにも名高い。周知のように、『青鞥』は、女性の手による女性のための思想・文芸・修養の機関として、平塚明子（らいてう）が、資金を母光沢に出してもらい、自身と友人保持研子ら、おもに日本女子大卒業生

が発起人となつて創刊された。青鞥社規則第一条には、「他日女流の天才を生まむ事を目的とす」と記されている。

創刊号の巻頭を飾つたのは、「そぞろごと」という与謝野晶子の詩であつた。十二ほどの短詩を連ねて、一つの長詩とも読めるように構成されていた。冒頭の「山の動く日来る。」は、女性運動の標語となつた感があるくらいよく知られているが、ここに初めの二つを引いてみよう。

山の動く日来る。／かく云へども人われを信ぜじ。／山は姑く眠りしのみ。／その昔に於て／山は皆火に燃えて動きしものを。／されど、そは信ぜずともよし。／人よ、ああ、唯これを信ぜよ。／すべて眠り

し女ぞ目覚めて動くなる。

一人称にてのみ物書かばや。／われは女ぞ。／一人称にてのみ物書かばや。／われは。われは。

らいてうは自伝の中で、晶子の詩が『青鞥』創刊号の巻頭を飾るにいたつた経緯を、おおよそ次のように述べている。

『青鞥』発足にあたり、このころ活躍していた女性作家たちに賛助員になつてもらうことにして、晶子のところへはらいてうが、賛助員としての原稿執筆を頼みにでかけた。ところが、晶子は下を向いたまま、低い声で独り言のように、女は駄目だということなど繰り返して話した。らいてうは、晶子の真意がつか

めないまま帰ったが、その晶子から、他の誰よりも早く届いたのが、この詩であった。訪ねたときには、女性の能力に対する不満をつぶやくようにもらしていた晶子から、この力強い詩を寄せられて、「青鞥」発起人たちは大喜びをした。さてはあのときのことばは激励の意味だったのかと思つたことだ、とらしいてうは記している。

晶子はすでにこの年七月には、第一評論集「一隅より」を出版しており、婦人問題について、「我等婦人は久しく考へると云ふ能力を抛棄してゐた。……明治の教育を受けたと云ふ中流婦人の多数が矢張首なし女である。

……近年婦人解放と云ふ問題が出てゐる。併し其れは婦人自身が言ひ出したので無く、物好きな一部の男子側、議論ばかりで実際にその妻女を解放し相にない男子側から出た問題である。……男子側から如何に多くの婦人問題をを出されても、婦人自身に目を覚さねば此問題の正しい解決は著かないであらう。……」（「婦人と思想」）というような発言を続けていた。らいてうを戸惑わせたもの言いようが、高等教育を受けたお嬢さんがたの遊びではないかという晶子の危惧の表われであつたとしても不思議ではない。この時、晶

子は満三十二歳、すでに七人の子があり、明治という難しい時代を生き抜いてきた。このことは、「そぞろごと」というさりげない題のつけ方からもうかがえよう。しかし、その詩は、休火山の火口底にたまりつつあるマグマのように、身内にぶつぶつと沸き立つ力の自覚をうたう「山の動く日来る。」に始まり、その結び「すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる。」の余韻を受けながら、新たに、「一人称にてのみ物書かばや」と謳いだす。「ばや」という助詞は、言うまでもないが、話し手の願望または意志をあらわす。女性の覚醒と解放は勿論のことであるが、女性であることが語るに価する一個充実した自我であること、それが力強く、のびやかに表現されている。女性だけの文芸雑誌「青鞥」の首途を言祝ぐものとして、まことにふさわしいものであつた。

晶子の詩に呼応するかのようには、らいてうは、八月下旬のむし暑い夜、静座したのち、「元始、女性は実には太陽であつた。真正の人は、八月下旬のむし暑い夜、静座したのち、生きて、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。……」と、ひと息に書きあげた。自伝によると、「元始」の女性を太

陽に、「今」の女性を月にたとえたのは、ただ、直観的に意識の表面に浮かびあがったもので、それがはからずも母系社会の崩壊と婦人の隷属の始まりを象徴するものとなつたといふ。らいてうが、大円光体「太陽」の比喩に託したものは、「生命の根源の象徴」であり、文中の「隠れたる我が太陽を、潜めるわが天才を発現せよ」とは、失われた女性の生—創造力—の全的回復を求めたものであつた。

晶子も、かつて「太陽の子」を自負し、「我を値踏す、かの人ら。／＼に買はるべき我ならぬ、／＼かの太陽に値のあらば」といふ詩を書いている。「おごりの春」の美しかったころである。太陽に託するものはそれぞれ違ふものがあるが、この二人の女性は、自らの光によつて月をも輝かせる発光体であつたことは疑いもない。

そして今、私たちは先人たちの強いエネルギーの恵みを受けている。この事を痛感するとともに、蛍ほどの光も発していない我が身が省みられるのである。

この夏の、やや、強烈にすぎた太陽だが、私にこのような想いを抱かせてくれたのであつた。